

はじめに

二〇〇九年一〇月、初秋にしては寒い日曜日だった。朝に弱い僕は、寝坊しないように三つの目覚ましをつけておいた。最後の目覚ましでやっと起き、電車で二時間揺られ、一、二時間に一本しかないバスに三〇分乗って、茨城県にある児童養護施設に向かった。仕事の傍ら運営しているNPOの活動の一環で、見学に来たのだった。

この日は、忘れられない日になった。

築三年以上の、大きな地震が来たら崩れてしまいそうな建物。天真爛漫で人懐っこい子どもたちの笑顔。その笑顔からは想像もつかない重い過去。燃え尽き症候群に陥りやすい過酷な施設の仕事。それでも子どもたちのための労苦を厭わない職員たち。

僕は単に見学に来たはずだった。でも、施設を見て、職員の話聞いて、子どもと話しているうちに、僕の中の何かが「おい、これは何かするべきじゃないか」と訴えかけてきた。

モヤモヤと考えごとをしながら、夕暮れが近づいてきた。別れ際に「また来るよ」と話す

僕たちに、子どもたちから言葉が飛んできた。

「そんなこと言って、もう来ないんでしょ」

この日から、僕は児童養護施設に定期的に通い、子どものために自分ができることを仲間と一緒に始めるようになった。

本業の傍らパートタイムで社会貢献

僕はビジネスパーソンだ。投資の仕事を始めてもう五年になる。いまの仕事は、会社の株式の半分以上を保有して、会社の経営陣とともにその会社の成長をサポートすることだ。サポートできることにある程度の区切りがついたら、保有している株式を売却することになるが、平均して五年くらいは株式を持ち続ける。こういった投資を行う組織をプライベート・エクイティファンドと呼ぶ。ある意味で企業の命を預かるともいえるこの仕事は、とてもハードだし必要とされる能力は幅広いけれど、とてもエキサイティングでやりがいのある仕事だ。

僕は、世の中がよくなるためには経済がよくなる必要があると信じている。だから、企業の成長をサポートするこの仕事には大きな意味があると考えているし、もっというろいろなことができるようになるために、早くこの業界における一流のプロフェッショナルになりたいと思っている。

でも、この「本業」だけが僕の人生のすべてなのか、というところでもない。世の中には本業を通じて解決できる問題もあるけれど、本業では直接的な対象としていない問題もある。たとえば、教育問題や貧困問題などは、僕の本業の主な守備範囲には入らない。もちろん、企業が成長し、経済が発展することによって、結果としてこれらの課題が解決されることはありうるけれど。

自分が取り組むべき課題を一つに絞ることは重要だと多くの人が言う。そうかもしれない。けれど、本当に人は一つの課題だけに取り組むべきなのだろうか。たとえば、「仕事と子育ては両立できない」と言って、仕事をする人は子育てをなおざりにしてよいのだろうか。

目の前にたくさんある課題について、たった一つに取り組み、と言わずに、きちんと優先順位をつけてそれぞれの課題に自分の二四時間を割けばよいのではないだろうか。

それに、本業一つだけをしていると、知識や経験の幅の広さが足りなくなつて、そのうちに本業そのもののパフォーマンスも頭打ちになる気もする。兵法を極めた宮本武蔵も、『五輪書』において、兵法を学ぶために必要なこととして、「兵法のみならず、世の中のさまざまな芸に触れること」を挙げている。自分の軸をちゃんと定めつつ、さまざまなことを経験する

のが、一流のプロフェッショナルへの近道となる可能性がある。

そういったことを考え、僕は本業以外にパートタイムで活動するNPOを立ち上げた。

たぶん昔も、本業を持ちながら、副業でいろいろなことをしている人は多くいただろう。友人にも、バリバリのビジネスパーソンでありながらミュージシャンである人はたくさんいる。

けれど、パートタイムで組織をつくって事業をするという話はあまり聞いたことがない。でも、将来にはパートタイム組織での活動は増えていくのではないかと僕は考えている。

そう考える背景には情報技術の進歩がある。情報技術の進歩は、人が「同じ場所にいること」の持つ意味をどんどん小さくする。手紙と有料電話しかなかった時代には、同じ場所に集まらないと仕事にならなかった。手紙や電話でのコミュニケーションと、面と向かってのコミュニケーションには情報の伝達量に格段の差があったからだ。

でも、今は違う。インターネットを通じて無料でテレビ電話ができて、会議通話もできる。文書や写真も簡単に共有できるし、グーグルドキュメントを使えば、みんなが同時に一つの文書を修正することもできる。情報技術が進歩すればするほど、ある組織のメンバーの全員が同じ場所にいる必要性は下がっていく。

少し前まで、五〇人のパートタイムメンバーが週に五時間ずつかけて活動しても、五人のフルタイムメンバーが週に五〇時間ずつかけた活動に敵わなかったのは、メンバーが同じ場所に

いないと情報伝達の効率が悪すぎたからだろう。でも、今はみんなの持っている細切れの時間をうまく集めたら、パートタイムのメンバーだけでも立派な事業をつくることができる。今でさえそうなのだから、将来にはもっといろんなことができるようになるはずだ。

そんな思いから始めたのが、完全パートタイムのNPOであるLiving Peace (LIP)だ。

LIPには、機会の平等を通じた貧困の削減と、パートタイムでもできる事業の見本をつくることへの想いをもった仲間が集まっている。全員が自分の本業を別を持っているパートタイム組織であるLIPは、日本で初となるマイクロファイナンスファンドを思い立ってから九カ月でつくった。金融機関が本業として準備しても、同じくらいの時間がかかる。

そして僕たちが国内で取り組むべき課題として選んだのが児童養護施設の問題だった。

なぜ児童養護施設の問題に取り組むのか

僕たちLIPが児童養護施設の問題に取り組む理由は、ここには深刻な「機会の不平等」があると思うからだ。

現在、全国には約五八〇の児童養護施設がある。三万人以上の子どもが、虐待や貧困などさまざまな「親の事情」によって自分たちが育った馴染みのある環境、親、友達、先生から半ば

強制的に引き離され、児童養護施設での生活を送っている。見慣れない土地。親とのやりとりは制限される。登下校で一緒に遊んでいた友達とは連絡をとる術もない。やさしくて大好きだった学校の先生とも会えないままだ。

児童養護施設にいる子どもが抱える一番の問題は、経済的なものではなく精神的なものだ。子どもたちが負っている心の傷は深く、その回復のためには人並み以上の愛情を受ける必要がある。しかし、ほとんどの施設では子どものケア職員の数が不足している。お金がないからだ。ケア職員一人を一年間雇うだけでも、ランドセル一〇〇個分のお金が必要だ。現在、児童養護施設のケア職員は勤務時間に平均して一〇人の子どもの対応をしている。家事や日常業務をするだけで一日が過ぎ、子どもへのケアを行き届かせるのは困難だ。

子どもの心が虐待の傷から回復しなくても、子どもの身体は時間とともに大人になる。見た目は普通の中高生と何も変わらないので、普通の環境で育った子どもたちと競争をすることに。これに耐えられない子どもも少なくない。二〇〇六年における児童養護施設の子どもの高校中退率は七・六％（全国平均の三倍以上）、大学進学率は九・二％（全国平均の五分の二）だ。

高校を卒業もしくは中退した子どもは、施設から出て行かなければいけない。特に高校を中退した子どもの多くはアルバイトに就くことすらままならず、苦しい生活を余儀なくされる。ビッグイシュー基金の『若者ホームレス白書』（二〇一〇年二月）によると、ホームレスのなかには児童養護施設の出身者が多いという。経済のグローバル化にともない、この状況は悪化

する可能性がある。

また、結婚をして子どもが生まれても、本来親が子どもをどう育てるべきかがわからないので、自分が親にされたと同じように子どもを育ててしまう。こうして虐待が「連鎖」する確率は三割から五割ともいわれている。

僕たちはこういった悲劇を終わらせることができるはずだ。それも、比較的短い時間で。

子どもは親を選ぶことはできない。でも、どんな親の下に生まれ落ちたとしても、社会はその子どもに自由に自分の人生を形作る機会を提供できるはずだ。僕はこの本を通じて、児童養護施設に住む子どもたちのこと、僕たちにできることを伝えたいと思っている。

「外からの視点」で社会を変える

この本は、児童養護施設の外の人間が書いた本だ。施設に関心を持ち、住み込みをして、定期的に通っているビジネスパーソンの書いた本であって、施設に毎日いる職員や研究者が書いた本ではない。だから、長年の経験や研究に裏づけられたことを書くことはできない。僕はただ、僕が感じたこと、これまでの経験で学んだこと、金融の世界にいる自分のスキルを活かして分析したこと、自分だからこそできると思うことを、ありのままに伝えたい。

この本を書くにあたって、葛藤は数限りなくあった。施設の職員や子どもたちと時間を過ご

せば過ごすほど、外部の人間である自分に何を書くことができるのだろうと途方にくれた。そんなときに励ましてくれたのは、もともと児童養護施設の職員で今はコンサルタントをしている梅本優香里さん、筑波愛児園の小林弘典先生らだった。

Out of the box という言葉がある。箱の外から物事を見ることが、すなわち客観的で独創的な視点を持つことを意味する。もし施設の外の人間だからこそ得られる視点があるのだとしたら、僕が児童養護施設について書くことには意味があるのかもしれない。

本書の構成を簡単に述べることで、本編に入る前の締めとしよう。

この本は三部構成となっている。

第一部「体験」では、僕がなぜ児童養護施設で活動を始めるようになったのか、児童養護施設とはどういうところか、といった内容を伝える。どちらかというと、物語調、エッセイ調に書かれたこのセクションを通じて、児童養護施設の雰囲気がある程度伝わること願っている。

第二部「分析」では、児童養護施設にやって来る子どもたちの事例を紹介し、入所する子どもたちの背景にあるものとその影響、児童養護施設の状態について、データや事実をもとに考

察する。このセクションは基本的にレポート調にまとめられており、可能な限り客観的に子どもたちや施設の状態を伝えるものとなっている。

第三部「行動」では、僕たちができることについて考える。簡単に始められる活動や僕たちの取り組みまで伝えたいので、働きながらできるパートタイム活動についてのこれまでの学びをシェアしたい。この本を通じて、一人でも多くの人が何かを変えるためのアクションを始められるなら、著者として望外の喜びだ。